

# I. 幼稚部

## 1. はじめに

### 1) 幼稚部における評価の観点

平成30年3月に稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時改訂(改定)された。その中核をなすものが、資質・能力の考え方とそれに基づく5つの領域と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。また、幼稚園教育要領においても、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくことが明示されている(文部科学省, 2018)。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児期の終わりまでに育ってほしい子どもの姿や能力を、5領域をもとに「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10の視点にまとめたものである(以下、「10の姿」)。そのため、「10の姿」は子どもが育ってほしい方向性を示したものであり、「こういうことができるようになる」といった達成が求められる課題ではない。幼児教育においては、あくまでも「目標」ではなく「姿」を評価することから、小学校以降の「達成目標」ではなく「方向目標」が用いられている。

### 2) 保育活動を通して育みたい力と他学部とのつながり

幼稚園教育要領では、以下を幼稚園教育の基本と定めている。

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通じて行うものであることを基本とする。(幼稚園教育要領 第1章総則-1)

特別支援学校幼稚部教育要領においては、下記のように幼稚部独自の教育課程編成の手順を示している。

幼児はそれぞれの興味や関心に応じ、直接的・具体的な体験などを通じて幼児なりのやり方で学んでいくものであって、小学部又は小学校以降の学習と異なり、教師があらかじめ立てた目的に沿って、順序立てて言葉で教えられ学習するのではない。

(中略)

一人一人の幼児の障害の状態や特性及び発達の程度等を考慮して、幼児の発達の各時期にふさわしい生活が展開されるように適切で具体的なねらいと内容を設定する。それらのねらいに関連した活動や指導が、どのような場面で展開されるかの見通しを立てる。

幼稚部では、幼稚園教育要領で設定されている5領域に加え、特別支援学校幼稚部教育要領における障害特性等に応じた自立活動の視点ももちながら、すべての環境を通して総合的に指導されるよう、保育の計画を立てている。

幼児期に培われた資質能力は小学校以降、どのような姿の実現につながっていくのかということは、【資料1】の関連図で示されている。【資料1】中の3つの円の中で例示される資質・能力は、5領域のねらい及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」から主なものを取り出して分けられたものである。この資質能力は遊びを通しての総合的な指導を通じて育成される。



図1 0～18歳の18年教育の体系（イメージ）  
『3法令改訂（定）の要点とこれからの保育（無藤隆, 2017）』

また今回の改訂の大きなポイントとして、幼児教育と小学校以上の教育を貫く柱を明確にするということがあげられている。0歳から18歳までさらにその先へと成長していく「資質能力」という用語は、幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもの力を共通に表している（図1）。0歳から始まる資質能力の芽生えは、少しずつしっかりとしたものになっていき、小学校以降、教科等の授業の中で形成されていき、高校卒業以降の社会の中で活躍する際の力の骨格となると考えられている。ここで大事なこととして、下から上へと成長していくものだという事、個々の教科や活動等の個別の学び

を含み込みつつ、人間を根底から動かす力（コンピテンシー）としての成長なのだということにある。そのことにより、年齢や教科等により教える中身もやり方も著しく異なりながらも、共通の力の育成に携わるのだということが明確になった。

具体的に幼児期の教育と小学校教育を接続する際には、その資質・能力の考え方をとりながら、それを保育内容や小学校の教科内容や授業の在り方の中に組み込んで捉える必要がある。幼児教育と小学校以降のやり方や在り方はその時期ごとにふさわしいものである。幼児教育では昨今この時期を「架け橋期」とよび、「架け橋プログラム」などが進められている。小学校の学習指導要領では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を引き継ぐ形でスタートカリキュラムが義務づけられた。これは子どもが幼児期に学んだ力（資質能力）を活かす形で少しずつ教科の教育へと移行する考え方であり、幼児教育側はその「姿」に向けて育て、小学校側はそれがある程度育っていることを確認しその先へと移行していくということといえる。

そこで幼稚部夏季研究会では生活科・社会科をはじめとした小学校以降に繋がる力の基礎の検討を行い、活動を通して育みたい姿を明確にした。幼稚部段階での社会科の基礎となるものは何か考えてみると、幼児期の社会というのは身近な大人・友達などの人→物という三項関係の成立を通して発達していく期間といえる。幼稚部では、これが「他人事を自分事として考えられる基礎」となるのではないかと（幼稚部段階での社会科の基礎）と考えた。これを通して、「集団活動の中で物や人を手掛かりに自主性や主体性を発揮する姿」、「物や人の面白さに気づき、よく見たり関わろうとしたりする姿」を育みたいと話合った。

### 3) 幼児の実態

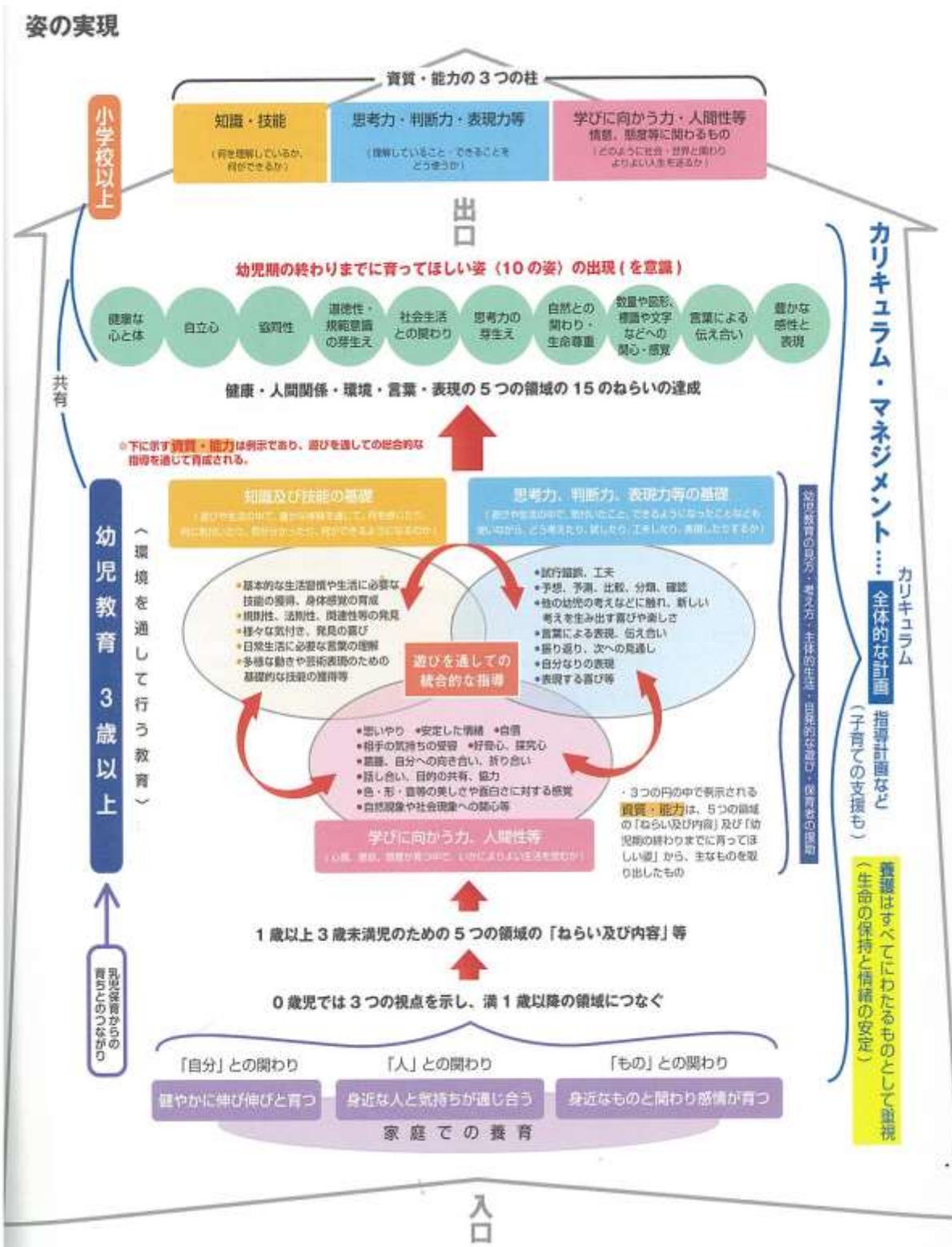
本学部は、さくら組（年長）5名、ひまわり組（年中・年少）4名の2学級、計9名の幼児で構成されている。全員に知的障害があり、併せ有する障害は、自閉スペクトラム症、ダウン症

など様々である。衣服の着脱や排泄、食事等の基本的な生活習慣については、全員が大人の支援が必要である。対人関係の実態は、身近な大人との関係ができつつある幼児から、友達との関わりを意識できる幼児までと幅広い。運動面の実態も様々であるが、どの幼児も粗大運動・微細運動ともに発達に未熟さや偏りがある。ダウン症の幼児や歩行開始まで時間を要した幼児は、動きの緩慢さやぎこちない歩行により、階段昇降やつまずきやすさ等が見られている。その他の自閉スペクトラム症の幼児は、走り回ったり高いところへ登ったりすることを好んでいる一方、静止や緩急等、行動を抑制することに難しさがある。また、どの幼児も手指の使い方にぎこちなさがあり、食事面に関しては全介助、もしくは手づかみ食べを併用しながら食具を使用している。なお、発語のある幼児は9名中2名だが、どちらも発音の不明瞭さがある。こうした実態を踏まえ、朝のあつまりの前に「たいそうあそび」を実施している。「たいそうあそび」の活動中に即時模倣が現れない幼児も、家庭やその他の場面で自主的自発的に再現する様子が見られている。これまでは単に走り回っていた幼児が、後ろ歩きや後ろあしけりを加えながら動き回るようになってきた等、動きのレパートリーも増加してきている。特別支援学校幼稚部教育要領では、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と示されている。また、健康、人間関係、環境、言葉及び表現の各領域のねらいや内容及び内容の取り扱いについては、幼稚園教育要領に準ずるものとし、内容については、「幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」と明記されている。

そこで本学部では、五感を十分に活用した体感的な活動を中心に据え、具体物を操作したり身体を動かしたりしながら環境に働きかけることを大切に、日々の保育活動へ取り組んだ。

(文責：藤島瑠利子)

【資料1】資質能力の3つの柱を表した図



『「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)と重要事項(プラス5)を見える化！10の姿プラス5・実践解説書(無藤隆, 2018)』

## 2.「にじりんピック」にむけた活動実践(包括的なアプローチの紹介)

### 1)「にじりんピック」にむけた包括的なアプローチ

#### (1)「にじりんピック」にむけた包括的アプローチとは

12月にはクリスマスあそび、2月には鬼あそびなど、幼稚部では季節ごとのテーマを中心に、うたあそび、読み聞かせ、造形あそび、たいそうあそび、音楽あそび、食育などの活動を相互に関連させあいながら展開している(資料2「年間活動計画」参照)。秋には幼稚部運動会(以下「にじりんピック」)に開催に向けて、活動毎にさまざまな取り組みを行った。ここで留意しておきたいのは、この取り組みは、単に各競技を事前に練習して覚えたということではなく、五感を活用したさまざまな体感的活動を展開したということである。これにより、「集団活動の中で物や人を手掛かりに自主性や主体性を発揮する姿」、「物や人の面白さに気づき、よく見たり関わろうとしたりする姿」を育みたいと考えた。今回は「にじりんピック」に向けて行った一連の活動を「包括的アプローチ」として捉え、その活動実践の一部を紹介する。

#### (2)「にじりんピック」にむけた保育スケジュール

図2は「にじりんピック」に向けて9月から10月に行った保育のスケジュールである。具体的には、朝のあつまりの前の時間は帯で「ようちぶたいそう」を行い、主活動が始まるまで一つ、教室内で競技の練習を行った。まずは小さな空間である教室で競技に親しんでから、体育館へ移動して行う流れで進めた。また、音楽あそびでドレミマットや人工芝を用いながら道を示してサーキット遊びを展開する、造形あそびの時間に「にじりんピック」ユニフォームを作成する等、活動毎に関連を持たせながら活動を展開した。

## スケジュール

9月							10月				
月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
			1	2	3	4	3 さんば	4	5	6	7
5	6	7	8	9	10	11					
12	13	14	15	16	17	18	10	11	12	13	14
19	20	21	22	23	24	25					
26	27	28	29	30			17	18	19	20	21
							24	25	26	27	28

図2 にじりんピックに向けた保育スケジュール

## 2) 包括的なアプローチにおける「うんどうあそび」の活動実践

### (1) 「うんどうあそび」と「たいそうあそび」のすみ分け

幼児の実態を踏まえ、2学期までの幼稚部の活動をアクティブに身体を動かして参加する「動」の活動と、着席を継続して参加する「静」の活動に分けて見直した。あつまりの活動の前に「たいそうあそび」を行うことにより、着席や注意の持続、応答性の高まりが見られるようになってきた。これにより2学期より「たいそうあそび」を体育館へ移動して行うものと、あつまりの部屋で日常的に行うもの、2つに分けて実施した。体育館での活動は、筋力や持続力、体力の向上を主なねらいとして週に2回、体育館のある3階まで階段を使って移動し、走ったりサーキットを行ったりした。



写真1 体育館でのうんどうあそび（サーキット）



写真2 「ようちぶたいそう」動画

### (2) 「たいそうあそび」の活動デザインと授業づくりのプロセス

毎日帯で朝のあつまりの前に「ようちぶたいそう」を実施した。これを通してさまざまな動きを導いたり、ふれあったりしてコミュニケーションを高めることもねらいとしながら、日常生活指導の一環として行った。また各家庭と連携を図りながら総合的な発達を促していきたいと考え、教員が演じる「たいそうあそび」のYouTubeを限定配信し、親子でやりとりをしながら家庭学習に取り組めるようにした。どの幼児も、タブレット端末やモニター画面等、フレーム越しに投影された動画へ注意が向きやすいため、活動は予め教員が録画した映像をモニター画面へ投映しながら展開した。「ようちぶたいそう」の動画を編集する際には、幼児の注意が向きやすい色や絵を背景画面に設定するなどの配慮をした。

幼児にとっての遊びは、遊ぶこと自体が目的であり、成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。中でも身体を動かす遊びは、幼児自身が手ごたえを感じながら参加することができる。そのため「ようちぶたいそう」は、パート毎の動作を短く設定し、映像・教員のモデル・音楽という手掛かりをもとに、自発的に動くことができるように構成を考えた。やるべきことが明確にわかる活動のもと、主体的な参加を促し、人との関わりや、その後の集団参加につながる力を育てていきたいと考えた。



写真3 「ようちぶたいそう」の様子



写真5 床面に敷いたセラピーマット

写真4 『うごくつくるあそぶ』

は、これまで『できるかな (エリック・カール, 偕成社)』で取り組んできた動作を座ったまま行うところから始めている。また、立つ、座る、低い姿勢で移動する動きを取ってバラバラに入れ込みくり返し行うことで、運動量の確保や、スムーズな姿勢転換を促した。12月より開始した「ようちぶたいそう2」では、新たに4つの動きを取り入れ、はじまりの3つの動きは、「ようちぶたいそう1」を引き継いだものを取り入れて構成した。各幼児が自ら取り組めるようになった3つの動きから始めることで、自信や見通しをもって取り組む姿を促した。しかし引き継いだ動きにも少々アレンジを加え、「首を左右に動かす」では、「首を横に傾けたまま保持 (キープ)」する動作を取り入れた。さらに正中線を超えて肩をたたく動き、ペアになって行う動き、横に寝転んで行う動きを取り入れた。また、床一面にセラピーマットを敷くことで、膝をついたまま動く、寝転ぶなどの動作が容易に行えるようにした。

### (3) 学校や家庭でみられる幼児の育ちと活動改善 (【資料4】エピソード記録表の活用)

#### ① F児の姿の変化

年中F児は身体障害者手帳を取得しており、今年度2学期までバギーを使って登下校していた。F児は動きが少なく、プレイルームでも一か所に座り込んだまま動かずに過ごすことが多かった。歩行はふらふらとしており、座位を保持しにくいことから、どこかに寄りかかるか仰向け姿勢でいることが多かった。しかし「ようちぶたいそう」が始まって以来、プレイルームや園庭で動き続けるようになってきた。また、「ようちぶたいそう」で覚えた後ろ歩きを、すべり台の階段に応用し、後ろ歩きで降りてあそぶことをくり返したり、自らトランポリンや平均台、階段昇降で日常的に遊んだりするようになった。

F児は自宅で「ようちぶたいそう」の動画を視聴する機会も多く、非常に表情よく視聴したり、動きを真似たりする姿が見られていた。「ようちぶたいそう」を始めて1カ月経過した頃の連絡帳 (図3) では、自主的にひざ立ち歩きを行うようになってきたことが記載されていた。即時模倣がまだ見られないF児だが、さまざまな場面から姿を捉えることで、変化を汲み取ることができた。さらに1月18日には保護者より、自宅付近の公園のすべり台で、「これまですべり台階段と斜面のアーチをくぐり抜けることが難しく苦戦していましたが、自分からひざ歩きをしてクリアし、斜面のところで足を延ばして滑ることができました。(資料3)」というエピソードを聞き取ることができた。

#### ② エピソードを共有することで見えてきたこと



写真6 ネットを登って遊ぶF児

家庭との連携や教員同士でエピソード記録表を記入することで、事例として取り上げたF児に限らず、他の即時模倣が見られない幼児においても同様に、さまざまな場面で「ようちぶたいそう」の動作が応用されていることが明らかになった。

一方、年長から自力歩行登校を開始したC児は、背中を床につけて仰向けの姿勢をとることを苦手としており、家庭より就寝時に仰向けをとることができないという相談を受けていた。これまでも「うんどうあそび」の時間に他児と一緒に仰向けになることを促してきたが、非常に激しい抵抗を示していた。しかし、『ようちぶたいそう2』の横まわりに寝転がる動きでは、自ら仰向けの姿勢を取って寝転がることができた。学校で見られたこのエピソードを家庭と共有したところ、自宅でこの動きを見たことがないということであった。このことから、教室の床一面にマットを敷いている環境設定が効果的であったのではないかと考えられた。また、形を捉えたり組み合わせたりする構成処理や、衣類の着脱を苦手とする年長A児は、正中線を超える肩たたきの動きを非常に苦手としていた。これにより得られた知見を活かし、教員と一対一で姿見を確認しながら動きを行う遊びに誘いかけるなどのアプローチを掛けることができた。

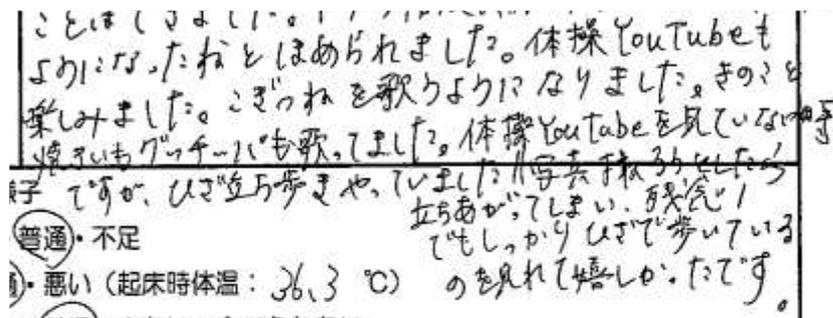


図3 F児の連絡帳

### 3) 包括的なアプローチにおける「ぞうけいあそび」の活動実践

#### (1) 入場旗・入場門づくりの活動デザインと授業づくりのプロセス

##### ① 入場旗・入場門づくりの活動実践

入場旗と入場門の制作は、「さつまいもあそび」の造形活動で親しんできたぬたくりあそびを応用して行った。まずは、入場旗から制作した。直接手を使って塗りに抵抗のある幼児や、工夫を施したい幼児のために、刷毛やローラーも用意した。2人から3人の小グループで、互いに様子が見合える環境のもと、一人一枚ずつ制作した。この活動の後に、入場門づくりを行った。いくつかの長机をつなげて、大きな模造紙いっばいに思い思いの色を塗りたくって制作した。直接手を使って塗りに抵抗のある幼児も、一人一枚ずつじっくりと入場旗をつくる活動を経て、徐々に活動自体の面白さに気づき、自ら直接手に色を付けて制作してみる姿をとらえることができた。



写真7 入場門を作成する様子

入場門づくりでは、その経験が活かされ、はじめのうちは少しかローラーを用いたものの、大半は他児と一緒に色を塗りたくって遊ぶことに夢中になる姿が見られた。また、どの幼児も色をじっくりと見分けながら制作しており、これについてもまずは一人一枚ずつじっくりと向き合って制作した経験が活かされているようであった。最後に入場門に掛ける暖簾づくりを行った。この暖簾は、ハンドスタンプにより制作した。一連の活動を経てから行ったため、自ら手を開いて積極的に取り組む姿が多く見られた。

## ②工夫点・配慮点

「ぞうけいあそび」の時間に制作したものはできるだけ早いうちに「うんどうあそび」（「にじリンピック」の練習）に用いて、活動のつながりを明確にした。

また、「にじリンピック」では、年長児が「開会のことば」を担当した。発語のない幼児もいることから、合図に合わせて全員で「にじリンピック」と書かれた暖簾を挙げ、その暖簾を入場門に掛ける一連の流れを「開会のことば」とした。これにより、どの幼児も同じように参加することが可能となった。

最後に道具の工夫として、入場旗の持ち手のデザインを紹介したい。旗を一人で持ちながら最後まで歩き続けることが難しい幼児たちに適した持ち手を検討し、旗の両側面に持ち手を付けることとした。これにより幼児と、一緒に入場する保護者が両端を持ち合いながら入



写真8 「開会のことば」の様子



写真9 入場旗を持ちながら入場行進

場行進をすることが可能となった。さらに幼児の持ち手部分には輪っかをつけて握りやすくしたり、握り続けることが困難な幼児には手首に巻けるゴムを施したりした。

入場行進は一人ずつ活躍できる場面であり、練習を繰り返すことで他の幼児の入場の様子に注目するようになってきたり、入場旗を持ちながら歩ける距離が少しずつ延びたりした。本番では保護者と一緒に座るベンチに入場旗を用意し、体育館へ入場してすぐに制作した旗について保護者に褒められてから「にじリンピック」が始まる流れをつくった。入場後は入場旗を舞台前に装飾して、幼児の満足感や達成感を促した。

## (2) 藍染め T シャツづくりの活動デザインと授業づくりのプロセス（造形あそび『藍染め（型抜き染め）をしよう！』の実践）

「にじリンピック」での取り組みの中でも、造形あそびを通して「にじリンピック」の時に使用するお揃いのユニフォーム（T シャツ）を作成した実践を紹介する。

### ①活動計画

本単元は、「造形あそび②～記念品を作ろう～」の小単元として計画された（資料5）。実施時期は9月中旬から取り組み始め、「にじリンピック」開催の10月中旬までに作品が完成するようにした。一斉指導で作品作りが難しい幼児もいるため、個別に対応しながら作品作りを進め、全5時間程度で完成した。

### ②活動の様子

## ②-1 型抜き

防染糊を、ヘラを使ってTシャツに付着させ型抜きを行った。型はシルクスクリーンを使用した。型が動かないように固定し、一人では難しい幼児は、教員と一緒に活動を行なうようにした。防染糊がしっかり布に付着するように最後の仕上げは指で防染糊を塗り込むようにした。

普段、初めての経験に戸惑いがちな幼児や、集中時間の短い幼児も教員と一対一で活動することで、安心して真剣に集中して取り組む姿が見られた(写真10)。



写真10

## ②-2 藍染め

藍染め染料を使って型抜きをしたTシャツに染色を行った。工程は(1)型抜きしたTシャツを水につける、(2)水を十分に吸わせたTシャツを藍染め液につける、(3)藍染め液からとりだしたTシャツを空気に晒す(藍の酸化を促す)、の3つである。

黒に近い濃紺の藍染め液や黒い液に入れたはずのTシャツが初めは緑色に染まり、空気に触れ、時間経過と共に鮮やかな青色に変化する様子を幼児は驚いた様子であった(写真11)。

## ②-3 作品完成：『にじりんピック』のユニフォーム

完成したTシャツを『にじりんピック』のユニフォームとして着用した(写真12、13)。幼稚部幼児全員でお揃いのユニフォームを着用することで、幼稚部としての一体感や活動としてのまとまりが生まれた。



写真11



写真12



写真13

## 3) 包括的なアプローチにおける「きせつあそび」の活動実践

### (1) 「さつまいもあそび」の活動実践



写真 14  
実物のさつまいもを触る様子

「食育活動（資料6）」の「さつまいもをたべよう」を実践するにあたり、テーマとなる食材のさつまいものイメージを幼児がもつことができるよう活動を設定した。

本来ならば芋ほりといった行事を設定するところだが、本年度の幼稚部は続くコロナ禍ということもあり、造形で作ったさつまいもを引っ張るお芋ほりごっこを想定した。

教員が買ってきた実物の大きなさつまいもを見て触って、その重さや感触や色を感じた幼児たちは、各々のイメージをふくらませて、教員や友達と一緒にさつまいもの色を選びぬたくりをした。ダイナミックに手指を使って絵具の感触を楽しむ幼児は、全身でぬたくりを楽しんでいた。感覚過敏のある幼児については、教員の支援を受けながら、スポンジローラーで絵具をぬることからはじめたが、友達がぬたくりを楽しむ様子に感化され指で絵具に触れる姿も見られた。絵具が乾いてからは、それぞれにぬったさつまいも色の画用紙の中に、幼児が両手を使って握った新聞紙を入れさつまいもに仕上げ

紐で繫いで蔓のようにした。

この造形活動で作ったさつまいもを使って教員と幼児での「さつまいもあそび」を展開した。「うんとこしょ、どっこいしょ！」「みんなで、さつまいもをひっぱろうね！」と教員や友達と一緒に



写真 15  
さつまいも造形(ぬたくり)あそびの様子



写真 16 握ってさつまいも形にする様子

自分で作って作ったさつまいもをひっぱるお芋ほりは、大盛況だった。認知の高い幼児の中には、毎日のように「おいも、おいも！」と教員をお芋ほりごっこに自ら誘い、共に「さつまいもあそび」をする様子が見られた。

また、この活動を通して、絵具をぬたくることから始まり、新聞紙や画用紙を握ってお芋にする事、そしてお芋ほりごっこでは、つるに見立てた紐をしっかり握って手で引っ張った。このように、「握る」、「引っ張る」など「うんどうあそび」につながる活動も取り入れることができた。「にじりんピック」の際は、出来上がったさつまいもを体育館入口に掲示し秋の大運動会」のサブテーマを象徴するオブジェとなった。また、作成した幼児の写真と作品を並べて掲示することで、保護者から称賛される機会にもなった。

## (2)「食育あそび」の活動実践

### ①食育に関する幼児の実態と活動の経緯

食事に関して、今年度在籍する幼児の大半が好きな食べ物だけ良く食べるが、苦手なメニューは食が進まないという傾向がある。入学当初から食に対するこだわりが強く、偏食外来へ通院をしている幼児や、全く食べないという幼児もおり、食べる事への興味関心が薄い幼児も在籍している。各保護者へ家庭における幼児の食事の様子を聞いてみたところ、給食の時の様子と同様なことが多くあることがわかった。特に偏食傾向の強い幼児の保護者からは、偏食でとても困っているという悩みや、家庭ではなかなか改善が難しいため、幼稚部で改善できないだろうかといったご意見が多く寄せられた。



写真 17 ジャがいもを見比べる様子

幼稚園における食育は、幼稚園教育要領における「健康」の領域に位置付けられており、「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心を持ったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」としている。

子どもの生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な幼児期に、育てたい「食べるちから」を伸ばしたいことから、本校幼稚園部では「食べることはいきること」として、「しょくいくあそび」の活動を実践した。



写真 18 調理を見る様子①



写真 19 調理を見る様子②

## ②幼児の育ちとG児（年少）の事例

自閉スペクトラム症のG児は、家庭では、じゃがいもの菓子を好み、食事の時間は、ハッシュドポテトやパン、うどんなどの決まった食事メニューを食べる傾向にあった。入学後、学校給食を全く食べない状況が続いたこと、家庭への聞き取りにより他児も含めて食事に関する経験不足が多くあることが明らかになったことから、調理の活動を計画することとした。G児はハッシュドポテトの他、じゃがいもを加工した特定のスナック菓子を好んで食べていたこと、他児も揚げ物を好んでいることから、じゃがいもを調理した（ポテトフライとポテトチップス）。G児は調理されたポテトフライとポテトチップスを非常に良く食べた。その後、学校給食で白米や小吹芋を食べるようになった。更には混ぜご飯の中からお米を取り出して食べる、煮物などじゃがいも料理の大半が食べられるようになるという変化が見られた。

G児は、決まったメーカーの同じフレーバーしか食べないと家庭から聞いていた。しかし食育あそびを通して、「形が変わっても同じ味」という普遍性が理解できたのかもしれない。また、G児がよく食べた給食のレシピを栄養教諭に聞き取り、家庭へ紹介するなども行った。この事例から、幼児期の食育は、活動、家庭生活、学校給食の連携が大切であると改めて実感することができた。



写真 20 調理したポテトフライを食べる G 児



写真 21 白米とじゃがいもが食べられるようになった G 児

(文責：藤島瑠利子、厚谷秀宏、岩附成子)

【資料2】幼稚園年間活動計画

令和4年度 幼稚部 年間活動計画														
学期	1学期				2学期				3学期					
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
主な学校行事	入学式・始業式				教育実習				運動会	大塚祭	お楽しみ会		協議会	お別れ会・卒業式
日常生活の指導 着替え・排泄・食事・清潔	個別の指導計画に基づき個に応じた指導を年間を通して行う				着替え・したく・衣服、靴の着脱/ボタン/衣服の片付け/ハンガーかけ/身だしなみ/かばんの扱い/連絡帳の出し入れ/自分の物が分かる 等 食事・食具の準備/手洗い/タオルしぼり/用意ができるまで待つ/スプーン等の使用/指輪/好き嫌い/意思表示/挨拶/片付け 等 排泄・定時排便/トイレへの入室/衣服の上げ下げ/便器の使用/排泄への意図/意思表示/手洗い 等 清潔・うがひ/手洗い/汚れへの意図/着替え/気温に応じる 等									
あつまり(朝の会)	あつまるの流れを知る ・自分の名前やマークを知る ・着席する ・あつまるの流れに慣れる ・好きな歌や活動を選ぶ				あつまるの活動を楽しむ ・好きな歌や活動を楽しむ ・音楽にのって遊ぶ ・大塚祭に関連した身体表現・歌を行う				あつまるの見直しをもつて参加する ・自発的に参加する ・年中行事に関連した身体表現・歌を行う ・卒業、入学に関連した身体表現・歌 を行う					
あそび	好きな遊びを見つける <プレイルーム> トランポリン、ブランコ、スイング道具、プラレール、ミニカー、ままごと、マグフォーマー、ボールプール <散歩> 近隣公園 学校の周り探検				遊びを広げる <園庭> 園庭道具、砂場(山、どろんご遊び)、三輪車、キックボード、葉っぱ遊び <その他>				離れを楽しむ 絵本、紙芝居、パズル、お絵かき					
うんどうあそび たいそう	身体を大きく動かす/体の部位を意識する/対象物をよく見て動く/模倣したりする/用具に合わせた体づかいをする													
ぞうけいあそび	体を使って素材に親しむ/色や形に関心を向ける/用具を使うことに慣れる/いろいろな素材で遊ぶ													
おんがくあそび	音楽に親しむ/歌を歌ったり、リズム楽器を使ったりする/動いたり、演じたりして楽しむ													
自然・探検・劇・絵本・ことば・かず遊び	アセスメントに基づき個別の指導計画の作成と指導の展開 絵本遊び(縦り高しのあるお話) 英語遊び(ALTと年間5回)				・絵本やストーリーに親しみ、真似をしあうことを楽しむ ・自然の変化や不思議等を感じ取り、興味や好奇心をもつ 指導者の評価、見直し、検討 ・探検(校外探検/「年天神に行こう」「お店へ行こう」「お店ごっこ」) ・自然(「じゃがいも」かぶ栽培/「花を育てる」) ・劇・絵本遊び(「おおきなかぶ」) ・ことば・かず(「オノマトペ絵本であそぼう」)「〇を探そう」				指導者の評価、見直し、検討 ・[探検]「校内探検」 ・[自然]「プレゼントづくり」(卒業お祝いあそび(成長を知る等)) ・[ことば・かず]「変身ポストあそび」「群読あ					
食育	きつおいもをたべよう じゃがいもをたべよう たまねぎをたべよう													
季節遊び	ちようちよあそび	こいのぼりあそび	傘づくり	七夕あそび	きつおいもであそぼう	運動会あそび	葉っぱあそび	クリスマスあそび	お正月あそび	鬼あそび	ひなまつりあそび			
親子レクリエーション	新入生歓迎会	保護者学習会①	親子ワークショップ			保護者学習会②	運動会	大塚祭		保護者学習会③	親子校外学習	修了おめでとう会		
自立活動	個別の指導計画に基づき実施。自立活動の内容を中心に、個のニーズに応じた課題を取り上げる													
交流	<本校中学期3学年>								交流①②③		交流④			
	<文京区立後楽幼稚園>				交流会①						交流会②			

### 【資料3】活動計画「うんどうあそび」

学部	設定保育	時数（想定）	実施時期	作成者
幼稚部	うんどうあそび	27	9月～10月	藤島瑠利子

#### 1. 活動名

ようちぶたいそう
----------

#### 2. 活動の構想

(1) 学習者の興味・関心 (幼児観)	3歳児から5歳児までの計9名で構成される。どの幼児も粗大運動・微細運動ともに発達に未熟さや偏りがある。ダウン症の幼児や歩行開始まで時間を要した幼児は、動きのぎこちなさはあるものの、音楽に合わせて身体を動かしたり、大人との手遊びを楽しんだりしている。自閉スペクトラム症の幼児は、走り回ったり高いところへ登ったりすることを好んでいる一方、静止や緩急等、行動を抑制することに難しさがある。
(2) 学習活動・教材 (題材観)	『うごくつくるあそび（筑波大学附属大塚養護学校,2004）』の動きの中から、現在の幼稚部在籍幼児が行うことのできる動作を抜粋し、さらに幼児の興味関心に応じて曲に一部変更を加えながら8つの動きを構成した。動きは、難易度の低いものから徐々に高いもの、より動きの多いものになっていくよう配列する。家庭学習用に教員の動作モデルをYouTubeで配信し、家庭と連携を図りながら進めていく。
(3) 題材の意義・展望 (指導観)	身体を動かす遊びは、幼児自身が手ごたえを感じながら参加することができる。そのためパート毎の動作を短く設定し、教員のモデル・音楽・映像という手掛かりをもとに自発的に動くことができるよう構成した。わかりやすい活動の中、主体的な参加を促し、人との関わりや、その後の集団参加につながる力を育てていきたい

#### 3. 活動目標（活動全体に関わる内容）

活動を通して目指す子どもの姿		
身体を動かすことを楽しみながら、いろいろな動きを経験したり、教員や友達と関わったりする。		
知識・技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
①意欲的に活動へ参加し、身体を動かす楽しさを味わう。 ②身体動作を通して教員や友達と関わる。 ③いろいろな身体部位を意識しながら身体を動かす経験をする。 ④教員や友達の動きを見て、「自分も一緒に遊びたい」「真似っこしたい」という気持ちが芽生える。		

#### 4. 活動計画

次	小活動名	時数	活動内容
1	リズムに合わせて首と肩を動かしてみよう	2	音楽と教員のモデルに合わせて『できるかな』で行った動き（首を左右に動かす・肩の上げ下げ）を行う。
2	脚の上げ下ろしをしてみよう	1	音楽が流れている間、座ったまま脚を伸ばして上下に上げ下ろしする。
3	首・肩・脚の動作を続けてやってみよう	1	習得した順番通りに各動作を続けて行う。
4	這い這いしながら先生や友達と触れ合おう	1	『♪メリーさんのひつじ』が流れる間、羊になりきって教室内を四つ這いで移動し、教員や友達と会ったら「こんにちは」とあいさつをする。
5	みんなで後ろに向かって歩いてみよう	1	セラピーマットの上で、教員や友達と手を繋ぎながら後ろ歩きをする。
6	膝立ち歩きで教室内を移動してみよう	1	教室内を膝立ちで歩いて移動する。 教員や友達と会ったら「こんにちは」とあいさつをする。
7	ジャンプを楽しもう	1	教員と手を繋いだり、一人で跳ねたりしながらジャンプする。
8	動画に合わせて動いてみよう	19	以下①②③の通り活動を展開しながらいくつかの動作を続けて行う。 ①モニター画面の映像を観ながら動く②音楽や教員、友達のモデルをもとに動く。③今日一番楽しかった動きを披露する。

#### 5. 活動の評価の視点

知識・技能の基礎	思考・判断・表現の基礎	学びに向かう力、人間性等
①意欲的に活動へ参加し、身体を動かす楽しさを味わったか。 ②身体動作を通して教員や友達と関わったか。 ③いろいろな身体部位を意識しながら身体を動かす経験をしたか。 ④教員や友達の動きを見て、「自分も一緒に遊びたい」「真似っこしたい」という気持ちが芽生えたか。		

【資料4】「ようちぶたいそう」エピソード記録（抜粋）

日付	幼児名	場面		エピソード	変化の概要
10/5	D児	家庭 玄関	登校時	朝、玄関まで後ろ歩きでやって来た。	身体の動き
10/6	I児	幼稚部 あつまり の部屋	自由あ そび	造形準備中にブルーシート上で走り回りながら、後ろ歩き、ジャンプ、馬跳びを自らくり返し行っていた（これまでは単に走り回るだけであった）。	身体の動き
10/6	G児	幼稚部 プレイルーム	自由あ そび	肩を上げ下げさせながら、くねくね道の上を歩いたり、プレイハウスの屋根に上ったりしていた。プレイルームの鏡の目の前で肩を上げ下げさせて遊んでいた。傍で教員が「かーたかーた」と発するとそれに合わせて行っていた。	身体の動き
10/7	I児	幼稚部 トイレ・ 着替えの 部屋	ト イ レ・着 替え	『トントントントンひげじいさん』の手遊びをしてみせる教員に向かってくり返し「もう一回やって」と要求（これまでは見せても無反応であった）。	コミュニケーション
10/6	E児	幼稚部 着替えの 部屋	着替え	『トントントントンひげじいさん』の手遊びの変化形「トントントンめがねざる」に変えたら笑って「うき」っと発した。	コミュニケーション
11/18	F児	幼稚部 プレイルーム	自由あ そび	自発的に後ろ歩きで巧技台の階段を上る遊びをしていた。	身体の動き あそびの変化
1/18	F児	自宅付近 の公園	すべり 台	これまですべり台階段と斜面のアーチをくぐり抜けることが難しく苦戦していたが、自分からひざ歩きをしてクリアし、斜面のところで足を延ばして滑ることができた。また、すべり台の階段から後ろ歩きをして降りる遊びを楽しむようになった。	身体の動き あそびの変化
1/18	B児	幼稚部昇 降口スロ ープ	下校時	後ろ歩きで教員に手を振り続けながらスロープを降りてかえった。	身体の動き コミュニケーション

## 【資料5】活動計画「ぞうけいあそび～記念品をつくろう～」

学部		時数（想定）	実施時期	作成者
幼稚部	設定保育	10時間	前期（9・10月） 後期（1・2月）	厚谷 秀宏

### 1. 活動名

ぞうけいあそび②～記念品をつくろう～
--------------------

### 2. 活動の構想

(1)	学習者の興味・関心 (幼児観)	3歳児から5歳児までの計9名で構成される。絵の具や砂などを大胆に触って感触を楽しめる幼児から、それを苦手とする幼児まで様々であるが、全般的に手や指先を使う経験は少なく、様々な感触や手や指先の動きを遊びを通して経験させていく必要がある。
(2)	学習活動・教材 (題材観)	鉛筆や鋏といった道具を使う前段階として、ヘラ、木槌といった操作の簡単な道具を用い作品を完成させる。また、染色は目の前で布の色が変化する様子を見て楽しむことができ、因果関係の理解を促すことができる。
(3)	題材の意義・展望 (指導観)	手指の巧緻性を高めていくだけでなく、お揃いのTシャツや巾着を作り、幼稚部への帰属意識、仲間意識なども高めていけたらと考えている。

### 3. 活動目標（活動全体に関わる内容）

活動を通して目指す子どもの姿		
教員や友達と一緒に、手や指先を使って色々な感触、動きを経験しながら、ものを作り出す楽しさを味わう。		
知識・技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
① 様々な手指の動き、簡単な道具を使う経験をする。 ② 教員や友達と一緒に活動し、やり取りを通して一緒に活動する楽しさを味わう。 ③ 自分の好きな色や形を見つけ出し、それを選び取るにより自分の気持ちを表現する。 ④ 作品作りを通して「自分もやってみたい」という挑戦する気持ちや「できた!」という達成感が芽生える。		

### 4. 活動計画

次	小活動名	時数	活動内容
1	『藍染め（型抜き染め）』をしよう!	5	(1)「にじりんピック」で使用するTシャツを作る。 (2)シルクスクリーンの型を用い、防染糊をヘラで布に付着させて型抜きをする。 (3)藍で染色する。 (4)「にじりんピック」でユニフォームとして着用する。
2	『絞り染め』をしよう!	5	(1)治具を使用し、布にビー玉とホースを取り付ける（布を絞る）。 (2)絞った布を染料で染める。 (3)染め上がった布の中から自分の好きな色の布を選ぶ。 (4)染色した布を使用して巾着に仕上げ、卒業生に記念品として渡す。

### 5. 活動の評価の視点

知識・技能の基礎	思考・判断・表現の基礎	学びに向かう力、人間性等
① 様々な手指の動き、簡単な道具を使う経験をしたか。 ② 教員や友達と一緒に活動し、やり取りを通して一緒に活動する楽しさを味わったか。 ③ 自分の好きな色や形を見つけ出し、それを選び取れたか。 ④ 作品作りを通して「自分もやってみたい」という挑戦する気持ちや「できた!」という達成感が芽生えたか。		

### 6. 活動計画の評価(次年度に向けて)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員と一対一の活動（ex.藍染の型抜き）が必要なため、一斉授業だけでなく個別活動も合わせて行った。</li> <li>・自分の好きな色を選ぶという活動がまだ難しい幼児が多く見られた。普段の生活や設定保育・集まりあそび等の時にも幼児に選択をさせるという経験を意識的に積ませていく必要がある。</li> </ul>
---

## 【資料6】活動計画「食育活動」

学部		時数(想定)	実施時期	作成者
幼稚部	設定保育	6時間	9月～11月	岩附 成子

### 1. 活動名

食育活動①②③ ～食べることは生きること・みんなで食べよう～
--------------------------------

### 2. 活動の構想

(1) 学習者の興味・関心 (幼児観)	3歳児から5歳児までの計9名で構成される。給食の様子を見るとバランスよく食べる幼児はわずかで、好きな食べ物だけは良く食べるが、苦手なメニューは積極的には食べない幼児が半数以上という状況である。自閉スペクトラム症の幼児は、入学当初から食に対するこだわりが強く、偏食外来へ通院をしている幼児や、全く食べないという幼児も加わって、食べる事への興味関心が薄い幼児が多いことがわかってきている。
(2) 学習活動・教材 (題材観)	食べ物の出てくる大型絵本の読み聞かせや手遊びや造形活動などを通して、調理の前に、テーマとなる食材への興味関心が高まるようにする。教員や友達と一緒に、身近な食材である「さつまいも」「じゃがいも」「たまねぎ」をよく見たり実際に触れたりする。また、教員の調理を目の前で見たり匂いを嗅いだりと五感で味わう喜びを体験することで、食べる意欲につながる経験を増やす。
(3) 題材の意義・展望 (指導観)	実際に身近な食材に触れたりして、「さつまいも」「じゃがいも」「たまねぎ」の色や形や重さを知ろうとする。教員が目の前で調理をするのを見たり感じる経験を通して、食べることへの興味や関心をもてるようにする。教員や友達と一緒に食べることの喜びを経験したことから「みんなとたべるとおいしいね」「おうちでもたべてみたい!」「きゅうしょくもたべてみよう!」など、食べることへの興味や関心が少しでも高まること期待している。

### 3. 活動目標(活動全体に関わる内容)

活動を通して目指す子どもの姿		
身近な食材を知り、教員や友達と一緒に食べることの楽しさを味わう		
知識・技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
① 意欲的に活動へ参加し、食べることの楽しさを味わう。 ② いろいろな食材に触れることで新しい食材を知る経験をする。 ③ 教員の調理を友達と一緒に目の前で見たり匂いを嗅いだりして「食べてみたい!」と感じる経験をする。 ④ 教員や友達と一緒に食べる経験を通して「食べてみたい!」「おいしかった!」という気持ちが芽生える。		

### 4. 活動計画

次	小活動名	時数	活動内容
1	さつまいもをたべよう!	2	(1) さつまいもを手のにせて触ったり、包丁で切った様子もよく見る。 (2) 「だいがくいも」の調理をよく見て、甘い匂いなどを感じる。 (3) 友達と一緒に「いただきます」のごあいさつをしてから食べる。 (4) みんなで「ごちそうさまでした」のあいさつをして、おいしかった気持ちを共有する。
2	じゃがいもをたべよう!	2	(1) じゃがいもを手のにせて触ったり、包丁で切った様子もよく見る。 (2) 「フライドポテト」の調理をよく見て、油で上がる時の音や匂いを感じる。 (3) 友達と一緒に「いただきます」のごあいさつをしてから食べる。 (4) みんなで「ごちそうさまでした」のあいさつをして、おいしかった気持ちを共有する。
4	たまねぎをたべよう!	2	(1) たまねぎを手のにせて触ったり、皮をむいたり、包丁で切った様子もよく見る。 (2) 「オニオンリング」の調理をよく見て、衣を付ける時の様子や揚げたての匂いを感じる。 (3) 友達と一緒に「いただきます」のごあいさつをしてから食べる。 (4) みんなで「ごちそうさまでした」のあいさつをして、おいしかった気持ちを共有する。

### 5. 活動の評価の視点

知識・技能の基礎	思考・判断・表現の基礎	学びに向かう力、人間性等
① 意欲的に活動へ参加し、食べることの楽しさを味わえたか。 ② いろいろな食材に触れることで新しい食材を知る経験ができたか。 ③ 教員の調理を、友達と一緒に目の前でよく見たり匂いを嗅いだりして「食べてみたい!」感じる経験ができたか。 ④ 教員や友達と一緒に食べる経験を通して「食べてみたい!」「おいしかった!」という気持ちが芽生えたか。		

### 3. 個に応じた指導（自立活動）の実際

本校幼稚部は、週に1回、一人約20分～40分の個に応じた指導（自立活動）を行なっている。本報告では、昨年度の研究紀要で取り上げたB児の自立活動における時間の実際や目標の変遷とその経過を報告する。加えて日常生活や自由あそびなどの場面での様子や変化も報告する。

#### 1) 対象児(B児)

B児は、年長組に在籍するダウン症男児である。年中時に入学し、本校幼稚部に1週間に3日間（水・木・金曜日）登校し、残り2日間は、自宅近くの子ども園に併行通園している。乳幼児発達スケールタイプTでは、総合発達年齢：1歳6ヶ月（2022年5月本校実施）。保育・教育歴としては、自宅近くの児童発達支援センター、区立子ども園。B児の年度初めに保護者に対してニーズ調査アンケートを行った。何か一単語でも言葉で意思表示ができるになってほしいという願いがあげられた。

#### 2) 自立活動の目標設定のプロセスと実践

##### (1) 本年度、前期の自立活動の目標設定のプロセス

4月の家庭訪問、ニーズ調査、子ども園担任との幼稚部担任同士の話し合いから、前期の自立活動の目標や内容を計画した。6月の面談で承認を得て、指導を行った。

「個別の教育支援計画」より抜粋

- |               |                           |
|---------------|---------------------------|
| ①基礎情報〈家庭での様子〉 | ・プラレールやボールなど動くものが好き       |
|               | ・掃除がだいすき（クイックルワイパー、掃除機など） |
|               | ・散歩（鉄道散策、石集め、岩登り）         |
| 〈願い〉本人        | ・ボール遊びがしたい                |
|               | ・お掃除がしたい                  |
| 保護者           | ・チャレンジ精神あふれる子になってほしい      |
|               | ・トイレでは「出そう」の意思表示をしてほしい    |

##### ②支援の方針と内容（他機関との優先的な共有事項）

- (1) 目指す姿 ・身の周りのこと（衣服の着脱、排泄、食事）を自分で行おうとする。  
・教員や友達と関わり、集団の中で役割を担う
- (2) 重点目標 ・身の周りのこと（衣服の着脱、排泄、食事）を自分で行おうとする  
・教員や友達と関わり、安心感を持って活動に参加する
- (3) 合理的配慮 ・大きな集団に急に参加しにくいとため、少し離れて教員と友達の様子をみて本人のタイミングを待って活動に向かえるようにする。  
・環椎軸椎の不安定さは、現時点で見られないが、念のため、前転は避ける

- |   |
|---|
| ・やりたい気落ちがあるが、どのようにして良いのかやり方がわからない。<br>→目と手の動かし方が経験の不足からできることが限られる。    |
| ・本人なりのやり方があるが、それを尊重してもらえない。<br>→自発性が育ちにくい。                            |
| ・課題ができて褒められて嬉しいが、何をしたかがあまり理解できていない。<br>→因果関係の理解や上下左右などの空間認知があまり明確でない。 |

そこで、目と手を使い、具体物を操作して何をしたかがわかる経験や何をしたかがわかり、本人が褒めて欲しいことや認めて欲しい事を尊重してもらえる経験や学習を通して、自信をつけ、自発性を発揮し、言葉による指示理解や発語につなげていきたいと考えた。

**②前期の個別の教育支援計画を踏まえた指導目標（自立活動） 令和4年6月作成**

- (1) できる動作模倣を増やし、ボディーイメージを高める。＜注意の共有、上肢下肢の動き＞
- (2) 具体物を摘む、持ち、位置や方向を意識して操作する。＜視覚、目と手の協応動作・手指の動き＞
- (3) コミュニケーション手段を拡げる＜発声発話、要求、注意の共有、できたことを理解する、伝える＞

自立活動の時間における指導では、指導目標の（2）と（3）を重視して取り組んだ。



写真 22  
透明筒ゴルフボール玉入れ  
—Bさんのやり方の尊重—



写真 23  
水平パイプ抜き  
—励まされれば最後まで—



写真 24  
入れるとチャイムが鳴る教材  
—因果関係の理解—

**③前期9月の自立活動の様子**（少しずつ動作や扱う事物に「言葉」を意識的に使う時期）

6月、7月の自立活動における時間で徐々に目と手の使い方が少しずつ向上し、因果関係の理解も深まり、やることがわかって、自信を持ち楽しんで学ぶ様子が感じられた。そこで時々「バイバイ」「もう1回」「しゅっぱつ」などの動作模倣が見られてきたので、それらの動きに言葉をつけることを意識して指導に臨んだ。

その中で写真 19 のスライディングブロックの教材は、ブロック

を動かす（スライドさせる）と、いろいろな曲のメロディーが流れてくる空間認知や因果関係を深める教材である。B児はこの教材を何度も試行する中で、「どうしたら曲が流れてくるのだろう」という仕組みが徐々に理解できてきたようで、自分からブロックをスできるようになってきた様子が伺えた。何度か行くと満足した様子が伺えたので、「じゃあね、またやろうね、バイバイ」と話しかけると、B児が手を振って「バイバイ」をしてくれた。

次の写真 20 では、始点と終点の理解を促す教材の一つである。B児が、プラレールが好きということもあり、電車の模型をスライドさせて終点に着くとピンポンと音が鳴る教材である。B児にとってはとても興味があったようで、自分から腕の伸ばしてやろうという意思をしめした場面である。始点からスタートするとき「しゅっぱつ しんこー」と声をかけると思わず、左手を上げて「しんこー」と左手の動作で表現をしてくれた場面である。



写真 25  
スライディングブロック



写真 26 バイバイと手を振る



写真 27 電車のスライディングブロック



写真 28 「しゅっぱつシンコー」と手をあげる

この他、左手の指を一本立てて、「もういっかい」

と表現する機会も増えてきた。合わせてこの時期には、5月にはできなかった直径6cmの木球を操作して棒に刺し入れることができた。加えて、それより小さい4cmや3cmの木球なども棒に差し入れることができるようになるなど、目と手の活用の仕方が向上している。

## (2) 後期の自立活動の目標設定のプロセス

本校は2期制のため10月の中旬から11月中旬にかけて個別の教育計画と自立活動の見直しと後期の指導内容を計画した。B児だけではないが、年長組として卒業までの期間を考え、その限られた範囲の中で達成できる目標や実際にできる具体的な内容を心掛けた。B児においては、日常生活では、身の回りのことを一人でできることを重点に、朝や帰りの支度を一人でできるようにと担任団で話し合い、B児も含めて、年長組男児(4名)の着替える場所の環境を整備した。特にB児においては、この時期、友達を意識して活動することが増えてきたので、着替えや排泄の場面で友達と一緒に着替える場面や、友達と一緒にトイレに行き(手を繋いだり、後を追いかけてたりして)友達にモデルになってもらう機会を増やした。またB児が興味を持っていた「係活動」も用意し、幼稚部の出欠など保健室に提出する「健康カード」を幼稚部の教室から保健室に運ぶ係を担当してもらう機会も設定した。自立活動の指導目標、内容は以下のように絞り込み、設定した。

### ① 個別の教育支援計画を踏まえた指導目標 令和4年11月作成

- |   |
|---|
| (1) 具体物を摘む、持ち、位置や方向を意識して操作する。 <視覚、目と手の協応動作・手指の動き> |
| (2) コミュニケーション手段を拡げる<発声発話、要求、注意の共有、できたことを理解する、伝える> |

指導内容として

- ・具体物を操作して、上下左右の空間認知や大きさ、色などを比較したり、同じ物を集めたりする。
- ・課題別学習の時間に、絵カードや音声ペンを使って物の名称などを覚える。覚えたものを使って、教員や友達との関わりを深める。

### ② 後期の自立活動の時間の実践

上記の目標に基づき、上下左右など空間認知、因果関係が分かりやすい教材、何をしたらがわかりやすい課題は、継続して行なった。また認知発達に視点を置いた評価では、B児のように、「触って(動かして)わかる段階」では、「見分ける(視線を横に動かす)」課題よりも「穴に落とす」「棒にさす」などの重力方向への活動を通して物の大きさ(入る、入らない)や運動の方向(上下)を学んでいる段階と考えられた。そこで以下のような木球の大小、重い軽い球、赤と青の色の比較(分類・弁別)などの教材を通して学習を行なった。



写真 23 大小の木球玉差し



写真 24 木とステンレスの軽重の玉入れ



写真 25 赤と青のゴルフボールの弁別

その成果として、大小も木球の弁別、木とステンレスの軽重の玉の違い、赤と青のゴルフボール玉入れの分類ができるようになってきた。

### (3) 自立活動と日常生活や遊びの場面での変化

#### ① 日常生活や遊びの場面での変化

- ・ 友達を意識する。関わりが生まれ、一緒に遊び、友達と笑いあってふざけたりする。

B児の併行通園先である子ども園から保護者を通して、「プールから帰る時、友達が帰る時に、ハット気付き、自分も一緒に帰ろうとあとを追いかける場面がありました」との報告があった。その後の9月の中旬くらいから、幼稚部の遊びの場面でも、動く車を引っ張る友達を追いかけていたりしていた。また立体マットの上に登り、友達のそばに寄り添うなどがみられてきた。11月からは、友達と一緒に手をつないでトイレに行き、B児はしないものの、友達が立って排尿するのを見ることもあった。「ようちぶたいそう」の場面では、肩を叩く体操で、友達の肩を叩いたり、叩かれたりして、友達からの行動も受け入れる経験もするようになった。

- ・ 発語がでた、増えた。

9月からの自立活動の時間における活動の中で、「バイバイ」「しゅっぱつ しんこー」「もういっかい」などの動作模倣がでてきたことを報告したが、ご家庭でも11月の後半に公園での落ち葉をみて「はっぱ」という発語があったとの報告があった。12月9日の健康カードを保健室に届ける「係活動」で保健室にいき、養護教諭に健康カードを渡して帰る際に「バイバイ」と発語があった。この時をきっかけに下校の場面でも「バイバイ」の発語が見られるようになった。その後、1月の中学部との交流授業の際に登場したアンパンマンの顔を見て、「アンパンマン」とはっきり発語があり、係活動で保健室に行ったときに養護教諭に「ありがとう」と言われ「ありがとー」との発語もあった。1月19日の自立活動の時間では、「しゅっぱつ しんこー」や「もう一回」を意味する「かい、かい」をはっきりというようになってきた。また家庭でも帰ってきた母親を玄関に迎えに行き、「ママ」と発語し、加えて最近では、くすぐりや追いかけてこを「かい、かい」と何度も言って要求する姿に「地獄のようです」と閉口しながらもご家族にとって嬉しい様子が報告された。

- ・ 排尿の成功回数が増えた。尿意を伝えることもあった。

B児にとって排泄の課題は、入学以来の課題であり、今年度の個別の教育支援計画の中でも『トイレでは「出そう」の意思表示をしてほしい』と保護者からの願いの中で挙げられてきた。幼稚部でもB児のトイレに行く気持ちを大切に「トイレカード」を作成し、まずトイレ行けたことを評価しながら進めてきた。転機になったのは、1月に併行通園をしている子ども園から「子供用の洋式トイレの便座に、しゃがんだ姿勢で座らせてみると、排尿に成功した」と保護者を通した報告である。そこで早速、幼稚部でも取り入れてみると、排尿の成功が1日に4回になり、約1時間の定時排泄での失敗もほとんどなくなってきた。また2月2日には、「係活動」が終わり、幼稚部の教室に到着寸に突然ズボンの前を何度か叩く行為があった。「Bさん、トイレ？」と尋ねると、焦った感じで「あー」と声を出し、急いで洋式トイレに駆け込み、そのまま普通に座って排尿することができた。次の日も「係活動」から帰る場面でも同じように尿意を伝えることがあった。2月9日に家でも、2回ほど尿意を伝えたという報告が家庭からの連絡帳で伝えられた。

このほかB児の変化として

- ・ 着替えやトイレなど、ひとりで行おうとする姿が増えてきた。
- ・ プレイルームなどスムーズに遊びにはいれるようになってきた。
- ・ 意思がはっきりしてきた。

などがあげられる。ここで自立活動の活動場面での変化と日常生活の変化との関連を考察する。例えば、排尿の成功回数が増え、尿意を伝えられるようになった背景には、まず子ども園での「洋式トイレにしゃがんで座り成功する」という成功体験がB児に、「尿が出たいとき

はトイレですればいいんだ」という理解に繋がったと思われる。そこには、自立活動の中で、電車の模型を動かして、終点にたどり着くと音が鳴ると、いった因果関係の理解、始点と終点の理解が関係していると思われる。また木球の大小、軽い重い、の違いなど、物を見分けることや物の違いに気づくことが、本人への気づきに繋がりと、「あ、なんか出そう！」と気づき、伝えることで、トイレに行区ことができ、成功すれば褒められる。それが「自分是可以る」という自信につながったと考える。



写真 26 ひとりで靴を履く



写真 27 健康カードをどう



写真 28 「バイバイ」と発声



写真 29 友達とぬいぐるみを取り合う



写真 30 友達と一緒にブロックで遊ぶ



写真 11 友達を乗せて走る

## ②自立活動での活動（学習）と、日常生活での指導や遊びの場面との連携

上記のような変化は、当然、自立活動の場面の活動（学習）だけの成果・変容だけではないと考えられる。そこには、他の幼稚部での活動、家庭での生活、週に2日併行通園している子ども園との連携（情報共有）やご家庭の協力があつたからだと考えられる。

また幼稚部の生活でも、日常生活の場面は、着替え、トイレ、係活動など複雑な課題である。「どうすれば、できるようになるのか?」「その課題ができるためには、その前の課題として取り組むことは何か?」と担任や学部の教師で課題分析を細かく行い、共有してきたことが、B児の成長の支えとなったと思われる。

これからもB児の得意な、見てわかる、見通しがもてるやり方を重視して、「できたね」と褒められる本人にとって嬉しい体験を増やし、次の活動に前向きに取り組めるようにしていきたい。

## ③まとめ

こうした自立活動の場面から得た情報や知見を他の場面（日常生活の指導、あそびなど）で共有しながら、どうしてこのような大きな変化が生まれてきたかを学部教師で共有し、話し合いながら一人ひとりに応じた課題や題材を用意し、その幼児に合わせた指導方法で活動を進めていくことが大切であると考えられる。またその上で、特に自立活動においては、一人ひとりの実態の把握に努め、認知発達の視点や発達のスケールを考慮しながら活動を進めることの大切さを感じた。

（文責：根本文雄）

## 4. まとめ（成果と課題）

### 1) 包括的アプローチの成果

「ようちぶたいそう」は、自発的な動きの少ない幼児の行動に変化を促したり、日常生活場面で苦手とする姿勢を自らとろうとする機会となったりした。「きせつあそび」では、幼児の生活の実態を考慮し、食育を中心に活動を展開し、偏食の緩和が促された。特別支援学校幼稚部教育要領においても、具体的なねらい及び内容は、幼稚部の生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化などを考慮して幼児の障害の状態、発達や経験の程度、興味や関心などに応じて設定することや、幼児が自らその環境とかかわることの重要性が説かれている。

また、幼稚部の活動は“あそび”を基本に成り立っている。子どものやりたいことを思いきり伸び伸びと自由に取り組みさせる中で、子どもたちは様々な学びを得て成長していく。それと同時に設定保育では、大人（教員）と一緒に楽しみながら活動に取り組み、自分ひとりでは少し難しい活動にもチャレンジし、「自分もやってみよう！」という挑戦する気持ちや「できた！」という達成感を育てていく。こうした挑戦心や達成感といった「学びの芽生え」が小学校以降の様々な学習の土台となっていくと考えている。

### 2) 自立活動との関連性の検討（成果）

時間における指導では、目と手を協応させながら積極的に物を操作したことで、因果関係の理解が進んだ。時間における指導で得られた知見を着替えの支援に活かしたり、併行通園先と連携しながら排泄の自立を促したりすることができた。コミュニケーションにおいても、絵カード、音声ペンを用いながらやりとりを確実なものにすることで自信がついたようで、相手を意識した行動が増え、発声が増加したり友達と一緒に取り組みたがったりする姿が見られるようになった。自立活動の指導は、日常生活場面に応用されてはじめて成果となる。幼児の環境そのものをよく理解し、時間における指導で得られた知見を支援に活かすこと、なにより本人の安心感や達成感、満足感に繋がる指導を行うことを第一に取り組むことが、幼児期の自立活動の意義であると考えている。

### 3) 今後について（課題）

活動計画は、全学部共通のフォームを使用している。個別の指導計画、月案や週案なども含め、幼児期の教育・保育に適したカリキュラムの作成に向けて各フォーマットなども今後検討を進めていきたい。さらに今後は小学部との架け橋を意識した取り組みも検討していきたいと考えている。  
(文責：藤島瑠利子・厚谷秀宏)

#### 【引用・参考文献】

- 無藤隆(2018)「「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)と重要事項(プラス5)が見える化！10の姿プラス5・実践解説書」p127. ひかりのくに株式会社
- 無藤隆・秋田喜代美(2011)「園の遊びがもたらす幼児期の「学びの芽生え」. これからの幼児教育を考える. ベネッセ次世代育成研究所
- 筑波大学附属大塚特別支援学校(2004)「うごくつくるあそび」
- 文部科学省(2019)「幼児理解に基づいた評価」チャイルド社
- 文部省(1993)「小学校教育課程一般指導資料」
- 無藤隆(2017)「3 法令改訂(定)の要点とこれからの保育」チャイルド社
- 障害児基礎教育研究会編(2006)水口浚、吉瀬正則、松村緑治、立松英子著「教材教具の開発と工夫」学苑社
- 水口浚(1995)「障害児教育の基礎」障害児基礎教育研究会
- 坂井聡(2002)「コミュニケーションのための10のアイデア」エンパワメント研究所
- 立松英子(2022)「子どもの心の世界が見える 太田ステージを通じた発達支援の展開」学苑社
- 立松英子(2023) 特別支援教育の実践情報「アセスメント 指導・支援に生かす子ども理解の深め方」 「発達認知段階を見とる教材教具」 p16. 明治図書